

中国のほんの話(63)

武部利男『李白の夢』

～ 漢詩の翻訳について ～

蔭山 達弥

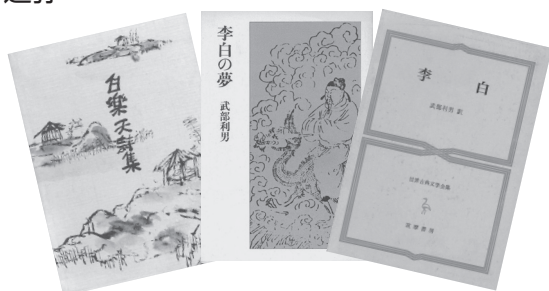
わが国における李白研究の第一人者である武部利男は、雑誌『VIKING』に三十年近くにわたって発表してきた白楽天詩の口語訳を、『白楽天詩集』(六興出版,1981)として一冊の書物としてまとめた。この日本語訳は、わずらわしい注釈は一切抜きで、しかも漢字をまったく使わないという、思い切った方法が試みられている。

「武部さんの訳詩はとても読みやすい。(中略)読んでいて漢詩の訳だということをもまったく感じさせない。『VIKING』同人評によれば、「白楽天・武部が一体になって」いるのである。しかもそれでいて、訳詩が原詩から離れることはほとんどない。その訳語は常に適確で、むだがない。」(笈文生『白楽天詩集』解説)

まつの した ひねす すわり／いけの
はた ときたま あるく／あるいても すわっ
ていても／きに かかる なにごとも ない／
しらぬ まに としつきが たち／めっきりと
しらがも ふえた／せけんから ばかに さ
れなきゃ／のどかには くらせぬ ものよ(『詠
懐』)

やまいに ふして やしきから／ずいぶん
ながく でなかつた／けさ むりをして でて
みたが／だれを たずねる あても ない／お
おかわばたの たかどのは いちねんあまり
ごぶさただ／あれ なつかしや はるかぜが／
さかやの はたを ひるがえす(『病起』)

武部利男は『漢詩の翻訳おぼえがき』(『李白の夢』筑摩書房,1982所収)の中で、「漢詩を訳すのに漢字を一字も使わずに、かながきにする。理由はなにかとよく聞かれる。答えはいろいろできるのだが完全な答えにはなりにくい。漢字を使わないほうが、わかりやすいからと、一応答えられるが、ぜんぜん漢字を使わないより、すこしは使ったほうがわかりやすく、読みやすいのではないかと反論できる。また、漢詩は中国の言語であり、そこに使われる漢字のニュアンスは、日本語としての漢字のそれと、ぴったり一致することもあるが、それは稀であり、むしろ微妙にずれるか、大きくくいちがうことのほうが多い。だから漢詩を訳すときに漢字を使うのは、たえず危険を伴うのであって、いっそかながきにしたほうが、じつは安全なのだ。そう答えることもできる。しかし、そういう危険を承知の上で、漢字の性質をわきまえて巧みに使いこなせば、矛盾や困難をのりこえて、か



えっていい訳ができるのではないかと反論もできる。どう答えてもいちいち反論が出てきて、議論しだせば簡単に片づきそうにない。」と述べている。

だから、武部利男は白楽天についてのみ、かながきを試みているにすぎない。かながきだけが漢詩の訳の唯一の方法と考えていない。李白については、漢字まじりかながきの、普通の表記法で訳している。

秦の国の羅敷女が／緑水のほとりて桑の葉をつんでいた／真白な手が桑の青い枝のうえにひらひらし／紅に化粧した姿が白日に照らされて鮮やかだ／蚕が腹をすかして待っていますのでわたしは帰らねばなりません／五頭立ての馬車を留めて いくらねばられてもだめでございませよ(『子夜呉歌 その一』、『世界古典文学全集27』筑摩書房所収)

『漢詩の翻訳についての感想』(『李白の夢』所収)の中で、武部利男は言う。

「ぼくがつねづね愛唱してやまないのは、井伏鱒二の名訳である。花ニアラシノタトヘモアルゾ／サヨナラダケガ人生ダ 漢詩和訳のうち、ぼくは井伏の訳をもっとも愛唱する。そしてそのたび、チクショウという気がする。ぼくは「訳詩」に絶望するのである。しかし詩は翻訳されねばならない。だからぼくは「詩の翻訳は詩でなければならぬ」という固定観念のようなものを、まずすてさることが必要だと考える。あくまで散文で、平易に、通俗的に訳すのが妥当と考える。中国の旧詩のリズムを日本語の翻訳で表現するのは、どうしても無理である。原詩のリズムに忠実であろうとすれば、失うものは、得るものよりも多い。漢詩の翻訳は、形式よりも内容をおもんじるべきである。世にヘタクソの訳詩ほど、つまらんものはない。」

かげやま たつや(教授・中国文学)